認定医症例報告

アタッチメントを用いた可撤性ブリッジによる上顎中間欠損補綴症例

坂下 勝啓

A Case Report of a Patient with Bounded Missing, Treated with Removable Partial Denture

Sakashita Katsuyoshi

抄 録

症例の概要：患者は60歳の男性で上顎右側ブリッジの動揺を訴えて来院した。⑦6⑤432①|①ブリッジ脱離，5|歯根破折と診断した。432|部に対してミニSGのアタッチメント装置を用いた可撤性ブリッジによる補綴治療を行い，5年経過するが経過は良好であった。

考察：脱離したブリッジの状況から，固定性ブリッジでは側方力に耐えることが困難であると判断した。また，アタッチメント装着により，機能的な咬合の安定が図られ，良好な経過が得られていると思われる。

結論：本症例では，アタッチメントを使用することによって装着感のよい可撤性ブリッジとなり，患者からも十分満足が得られ，機能的にも良好な結果が得られた。

和文キーワード

アタッチメント，可撤性ブリッジ，中間欠損

I. 緒 言

欠損部に対する治療法にはさまざまな方法があるが，クラスプを用いたパーシャルデンチャーでは，金属色が外観にふれるため審美性が損なわれるばかりではなく，装着感などの点からも患者が適応できない場合がある¹⁾。これらの問題点を解決する手段として，アタッチメントの使用やコーヌスクローネの応用，歯科インプラント治療などが挙げられる²⁻⁴⁾。

今回，上顎の中間欠損に対して，咀嚼機能の回復および審美性の改善を目的にアタッチメントを使用した可撤性ブリッジの補綴治療を行い，良好な結果が得られたので報告する。

II. 症例の概要

患 者：60歳，男性。

初 診：1997年9月。

主 訴：上顎右側のブリッジの動揺による咀嚼障害。

現病歴：1994年に近医にて⑦6⑤432①|①ブリッジを装着し，経過は良好であった。しかし，ブリッジ装着3年後に同部のブリッジが動揺するようになり，疼痛はなかったので放置していたが，2週間前から動揺が激しくなり咀嚼障害を訴えて，1997年9月に岩手医科大学歯学部附属病院第二補綴科を受診した(図1)。

現 症：⑦6⑤432①|①ブリッジが1|1部で脱離しており，54|部の歯肉に発赤および腫脹が認め

図 1 Intraoral views at first examination
初診時口腔内写真

られた。また、5は歯根上部で破折していた(図2)。支台歯の一部に深い歯周ポケットが存在したが、動揺は認められなかった。

診断・治療方針：5歯根破折，⑦6⑤432①①ブリッジ脱離による不適合，全顎的な慢性辺縁性歯周炎と診断した。

5の破折片を除去した後，切開を加えて歯肉を剝離したところ，残存歯根の骨植は良好であり破折部は骨縁上であったため保存することとした。また，咀嚼機能の回復および審美性の改善を目的としてプロビジョナルレストレーションを早期に装着し，機能と形態の改善を行うとともに歯周治療を行って歯周組織の状態が安定してから補綴治療を行うこととした。患者は，上顎に旧義歯のような床の大きい部分床義歯を装着することに対して難色を示したため，補綴装置はアタッチメントを応用してできるだけ装着感の良いものを選択することとした。下顎に関しては，レジン床義歯によって十分に機能および形態の回復ができると考えられ，患者の義歯に対する抵抗もないため，クラスプを使用したレジン床義歯を装着することとした。

III. 治療および経過

補綴装置として⑦6⑤を固定性ブリッジとし，1①を陶材焼付铸造冠とした。432中間欠損部に対

図 2 Views of fixed partial denture
撤去したブリッジ

図 3 Intraoral views of inserting provisional restoration
プロビジョナルレストレーション

してはミニ SG のアタッチメントを用いた可撤性ブリッジによる補綴治療を行うこととした。下顎には4|45にエーカースクラスプを設置したレジン床義歯を装着することとした。また，③4⑤を固定性ブリッジとして遠心にアタッチメントを応用した67部の部分床義歯を装着し，1|12には陶材焼付铸造冠とすることとした。治療計画を十分に説明し，同意を得たうえで治療を開始した。

はじめに，プロビジョナルレストレーションにより機能および形態を回復した後，5カ月間にわたり歯周治療および感染根管治療を行った(図3)。問題なく経過し，歯周組織の改善が認められたため補綴治療に入った。プロビジョナルレストレーションにより設定

図 4 Insertion of removable partial dentures
上顎ブリッジおよび下顎義歯装着時口腔内写真

図 5 Intraoral views at three years after treatment
術後3年経過時口腔内写真

した顎位および側方運動時のガイドを半調節性咬合器 (HanauH2, ハノー) にトランスファーした。

1998年12月に、上顎は 765 铸造ブリッジ、11 に陶材焼付铸造冠、432 中間欠損部に対してはミニSGのアタッチメントを用いた可撤性ブリッジを装着した。下顎には 445 にクラスプを使用したレジジン床の部分床義歯を装着した (図4)。その後、上顎左側の欠損部に対する補綴処置について患者は十分に食事ができているので、パーシャルデンチャーは製

作せずこのままにしてほしいと強く希望したため、345 および 112 陶材焼付铸造ブリッジを装着し、経過観察を行った (図5)。

経過観察中 (2000年10月) に 43 の人工歯脱離および床部分の破折があり修理を行った。その後2年間は良好に経過していたが、2002年11月に患者が転倒した際に顔面を強打し、アタッチメント部が変形したため修理と調整を行い現在まで良好に経過している。

IV. 考 察

本症例では補綴治療後から現在まで 6 カ月ごとにメンテナンスを行っており、支台歯および歯周組織の状態が良好に保たれ咬合状態も安定している。外科処置を行うことへの抵抗感、経済的理由などからインプラントによる治療は行わず、ミニ SG のアタッチメントを使用した。旧義歯に比べて装着感のよい可撤性のブリッジとなった。また、ポンティック部を有床型としたことで顎堤の陥凹感を改善でき、患者からも十分満足の得られる補綴治療を行うことができた。

本症例では犬歯が欠損しており、咬合の与え方に苦慮した。特に咬頭嵌合位では 3] の強い咬合接触を避け、さらに側方運動時のガイドは 543] 部に与えたものの、3] での接触面積は小さくなるようにしながら左右のバランスをとった。経過観察中に人工歯脱離および床部分が破折した。これは咬合状態よりもレジン床部分の厚みが不足していたことが原因であると考えられたため、強度を増すことと装着に対する違和感がないように調整を行った。可撤性ブリッジのアタッチメント部を含め、歯周組織と咬合の経時的変化には十

分留意する必要がある。今後も定期的なメンテナンスを行っていく予定である。

V. 結 論

上顎中間欠損症例に対してミニ SG のアタッチメントを用いて可撤性のブリッジを製作し、審美的、機能的にも良好な結果が得られた。

文 献

- 1) 遠藤忠治, 永井成美, 石橋寛二. Dental Esthetics に関する意識調査—患者サイドの要求事項について—. 歯科審美 9: 223-226, 1997.
- 2) 田中謙治, 星野和正. 磁性アタッチメントによる欠損部審美補綴. 歯科審美 14: 196-202, 2002.
- 3) 三澤弘子, 宇和山 猛, 青山貴廣ほか. I-C アタッチメントを用いた部分床義歯に関する調査. 歯科審美 16: 225-233, 2004.
- 4) 黒田昌彦: コーヌスクローネ 9-20, 東京: 医歯薬出版, 1984.

著者連絡先: 坂下 勝啓

〒020-8505 岩手県盛岡市中央通 1-3-27

TEL: 019-651-5111

FAX: 019-654-3281

E-mail: ksakashi@iwate-med.ac.jp

A Case Report of a Patient with Bounded Missing, Treated with Removable Partial Denture

Sakashita Katsuyoshi

Department of Fixed Prosthodontics, School of Dentistry, Iwate Medical University

J Jpn Prosthodontic Soc 50: 99-102, 2006

ABSTRACT

Patient: The patient was a 60-year-old male with the chief complaint of loosening of the bridge on the upper right side. The diagnoses of the patient were detachment of the bridge (⑦6⑤432①|①) and root fracture (5)]. A cobalt chromium plate with Mini-SG attachment was used at 432] to fix the bridge. The course of the patient was uneventful five years after the treatment.

Discussion: Judging from the condition of the detached bridge, the same type of fixed bridge was considered too weak to withstand the lateral force. Stabilization of the functional occlusion was achieved by using the attachment, followed by good clinical results.

Conclusion: The patient was satisfied with the comfort of the removable partial denture with attachment, and good functional results were obtained.

Key words

attachment, removable partial denture, intermediary defect